

武部 勤のアジアの未来図



武部 勤氏 略歴

前衆議院議員(8期)。農林水産大臣(第33代)、自由民主党幹事長(第39代)、衆議院議院運営委員長(第63代)を歴任。

議員時代にベトナム友好議連会長、インドネシア友好議連会長、メコン友好議連会長、モンゴル友好促進議連会長、パーレーン友好議連会長を務めたほか、今年3月1日には社団法人日本ベトナム経済フォーラムの名誉会長に就任するなどアジアを中心とする諸国との友好に尽力。このほど一般財団法人「東亜総研」を設立し代表理事に就任。

ズン首相らベトナム要人との 会談を終えて

「東遊」から「日越大学」につながる人材育成の夢

9月11日から18日までベトナムを訪れ、ズン首相をはじめとして様々な方とお会いしてきた。今回はその内容をお伝えしたいと思う。

その前に、皆さんは9月29日にTBSで放映されたドラマ「ザ・パートナー」をご覧になっただろうか? 日越国交樹立40周年事業のひとつとして、日本とベトナムの両国で同時放映されたドラマである。明治時代および現代の日越交流を描いたもので、ストーリーのひとつの軸となるのがベトナムの英雄ファン・ポイ・チャウ(1867~1940)。独立運動家であったファンは日露戦争における日本勝利に勇気づけられ、武器援助を求め訪日する。しかし犬養毅に「武器援助はベトナムのためにならない。ベトナムのためにならないことを協力するわけにはいかない」「ベトナムにとって重要なのは人材教育であろう。その分野なら大いに協力しよう」と説かれ感服、ベトナムの若者達に「日本に学ぼう」と日本への留学を呼びかける。これが後のベトナムに大きな影響を与えることとなった「東遊(トンズー)運動」である。

私は、現代においても日本とベトナム両国にとっての最重要課題のひとつは教育だと考えている。

クアン大臣との会談について ベトナム人教官の育成から開始

今回の訪越の目的は前回紹介した日越大学構想について、ベトナム側の考えを聞いてコンセンサスを得ることであり、その手応えを十分に得ることができた。

9月13日、グエン・クアン科学技術大臣とトー・ファイ・ルア政治局員(越日友好議連会長)と相次いでお会いした。

クアン大臣は「政府は国際レベルの大学を設立することを目標としている。ハノイに『アジアのハーバード』をという日越大学構想は素晴らしい。科学技術の分野での研究・教育とともにベトナムの政策制度と経済発展に資するマネジメントの教育も期待する。この大学構想を応援したい」と話して

くれた。

ただ「現時点でベトナム人に教官を務めることは無理だろう。日本人教師に来て貰わなければならない。そのコストをどうするのか」という問題点も指摘された。

私はこれに対する回答を持っていた。日本には毎年多くのベトナム人留学生が訪れている。日本学生支援機構によると、2013年5月現在でベトナム人留学生は4,373人と国別で4位という多さ。しかも中国や韓国からの留学生が減少するなか、ベトナムは毎年8%近く増加している。いわば現在も「東遊運動」は続いているわけだ。

まず大学院大学を3年後をめどに設立し、こうした留学生を中心に教育する。その後、彼らに日越大学で若き教官として活躍してもらおうというのだ。日本の大学との連携により、インターネットを通じた遠隔教育システム

を並行して活用すれば、クアン大臣の懸念は解消されるはずである。この考えは後に紹介するズン首相にもお話しした。

ルア会長との会談について 東急による新交通も話題に

ルア会長との会談は、長年の付き合いもあり和やかに進んだ。

「私は個人としてもベトナムの指導者としてもこの構想を支持する。他のベトナムの指導者も皆支持している」「12月のズン首相訪日の際に日越首脳会談の議題に入れるのがいい。そんなに難しい話ではない。明日ズン首相にお伝えする」と力強い励ましの言葉もいただいた。

ルア会長にはもうひとつ新交通網についての提案もさせていただいた。

私はこのごろベトナムを訪れて感じ

ることがある。それはオートバイの数の多さと同時に、自動車がずいぶん増えたということ。そのため交通事故や渋滞が急増しているという。

原因はいくつかあろうが、ひとつにはちゃんとした公共交通手段がないということが挙げられる。バスもあるのだが治安などの問題であまり利用されていないのだ。

現在、東急電鉄とビンズン省のベガメックス社によるジョイントベンチャー「ベカメックス東急」がビンズン新都市で総投資額1,000億円という大プロジェクトを進めている。

その一環として、ビンズン省の省都が来年移転するのに伴い新しい公共交通手段としてコンピューターシャトルの導入を計画している。従来のバスと異なり、定時運行および快適な交通手段となるもので、その意義は交通渋滞の緩和、交通事故の減少、環境保全など極めて大きい。

この意義と課題についてもルア会長は深い理解を示していただいた。

最後に「武部さんの今日の話には、ベトナムの突破口となる3つの政策のうち2つがあった。ひとつは日越大学の設立。つまり人材育成の話。2つめは新交通手段、すなわちインフラ整備である。日越大学については実現に向け全力で努力させていただく。新交通に関する提案も筋道が通っている。私としても検討させていただきたい」と支援を約束してくれた。

そしてズン首相との会談へ

ゲン・タン・ズン首相とは14日にお会いすることができた。土曜日だというのに、わざわざ時間を取っていただいた。この構想が成るも成らぬも安倍首相とズン首相の判断にかかっている。私も自然と力が入り、懸命に説明した。

ズン首相からの回答は極めて好意的なものだった。

「日越大学は日越外交40周年にふさわしい事業だ。12月に訪日した時に安倍首相とよく話し合ってみよう。

すでに関係省庁に対し11月までに基礎調査(F S)を実施し報告するようにと指示をしている。ホアラックハイテクパークは日越戦略的パートナーシップの象徴的な事業であり、その敷地内に日越大学を設立するのは重要なことだ。ベトナムの将来ある若者達の夢と希望につながる大事業となるだろう」

このような強い意欲を示していただき、私もさらなる勇気が奮い起こされる思いがした。

解決すべき問題は少なくない。人材やコスト、立地問題など今後詰める必要がある案件も多い。16日にベトナム国家大学ハノイ校のニャー学長とも会談したが、そのとき「日本側の窓口となるのは日越議連会長の二階俊博先生、ベトナム側はルア会長。私は引退した身で、かつ議連の特別顧問を務めている。時には民間人、時には政治家となるがよろしく願いたい」と申し上げた。あくまで主役となるのは安倍首相やズン首相、そして二階先生とルア会長である。

私は縁の下の力持ちとして精一杯支えていきたい。

KAIZEN吉田スクールの新校舎が完成

ESUHAI(エスハイ)という会社をご存知だろうか？ホーチミン市に拠点を置き、日本国内やベトナムに進出している日系企業への人材紹介を事業としている。同社の人材教育を行う組織としてKAIZEN吉田スクール(KAIZEN日本語学校)がある。2006年に設立された同校名の「吉田」はレコフグループ代表の吉田允昭氏にちなんだもの。ESUHAI社長のレロンソン社長が訪日していた際、吉田氏から激励され感銘を受けたことから、名前を校名にもらったということだ。吉田氏は名誉校



ズン首相と会談を終えて。右手は急遽、駆けつけてくださった前・駐ベトナム大使の谷崎泰明氏

長に就いておられる。

9月12日、ESUHAI新社屋およびKAIZEN吉田スクール新校舎(ホーチミン市タンビン区)の竣工式に招かれ出席した。8階建ての立派なビルであった。建設費は10年ぶりとなる海外投融資の再開後初の案件として、国際協力機構(JICA)から融資を受けている。

同校では毎年800~1,000人のベトナム人に日本語や日本文化、日本企業 of 精神などについて深い教育を施し、日系企業に優秀な若者達を紹介する計画となっている。

私は今回、同校で学ぶ若者達と話をする機会があった。なかでもひとりの若い女性が「卒業後は日本の水産会社で研修したい。そして帰国後はベトナムで水産会社を起こしたい」と語っていたのが印象に残っている。皆が意欲溢れる若者であった。

レロンソン氏はこう話しておられる。「存分に学び働くことができるための意識・能力を育てる教育こそが必要である。日本企業に優秀なベトナム『人財』を提供し、ベトナムは日本の高度な技能・技術・知識を得る。それにより日越両国が共に発展できるはずだ」と。

私もまったくの同感だ。犬養毅が語った人材教育についての信念が、現在もベトナム人の心に受け継がれている。日本人もこの言葉を今一度、想起し日本のこれからの国是とすべきではないだろうか。